道の駅という呪い

ありえない選択をする

ゆだねたらなんとかなる

コモンズは自分で持っていないと

地域の中で自分の立ち位置を考える。ときには揺らぐことだってあるはずだ。地域ともっと関わりたい。近隣トラブルが面倒だから、関わりたくない。距離感はひとそれぞれだ。日々変わる地域と自分との関係値の中で、なにを頼りに毎日を積み重ねていけばいいのか。そんな不安があっても、灯火となるコモンズが自分のなかにあれば、落ち着いていられる。公共。それは自分の遊び場にもなるし、シェルターにもなるはずだ。

人が一日で下す決定は35000回以上と言われている。明日何時に起きるか、ドアを開けるかどうか、右に曲がるかどうか、信号で止まるかどうか…。生きていくことは決断することで、決断するたびに自分に負荷をかけている。決定は、ストレス。しかしわたしたちは本当に、それほどまでにすべてを決定しないといけないのか。秋田で暮らす人は言った。「ゆだねたら、なんとかなる」ゆだねる勇気がないだけで、実際はもっと息を吐くことができる。

どこで暮らすか。誰しもが考えることで、暮らす場所を考えるときは多角的な視点で選択をしていく必要がある。どんな家に住むか、仕事はどうなるか、学校はどうなるか…。多くの人は打算的に選択をする。それは何も間違っていない。でも、ときにはその瞬間だからこそ、ひょんなことで選択肢が増えることだってあるはずだ。自分が今持っているカードの枚数は、視点を変えてみると増えたり減ったりするかもしれない。

男鹿半島の入り口、男鹿線の終点の男鹿駅からすぐに道の駅「オガーレ　なまはげの里」はある。その一角にはレストランや市民病院なども集まっていて、一見便利なように見える。しかし、男鹿の魅力はどこにあるだろう。施設が集まっていることで、その先へ足を運ぶことを阻害してしまわないか。バブル期の観光は本当にすごかったとみなが声を揃える男鹿半島。優美な自然と独特の文化を持つこの地を知るために、集約された便利さは必要？

スクールバスの功罪

秋田は誇る場所ないよ

根無し草の役割

体で覚える

マタギの里と言われる「根子」の番楽の練習は子どもたちが主役。根子近隣の集落からも、番楽をやりたい！と通う子供もいるという。最近、9年ぶりの移住者がやってきた。20代の彼は、子どもたちとともに番楽の練習を受けている。練習は、毎週行われる。アクロバティックでたおやかな番楽の動きは一朝一夕では身につかない。「体で覚えるしか無い」。舞いの形式が能楽の先駆を成す根子番楽。古くから伝わる新しい動きは、体にじんわり染み込ませるしか自分のものに出来ない。

誰しも生まれ故郷といま暮らしている場所があり、人によってそれは同じだったり違う場所だったりする。ずっと同じ場所にいる人と、違う場所に腰を据えようとする人それぞれのジレンマや悩みを抱えている。遊牧民のようにたゆたうもよし、その場所に根をはろうとするもよし。生まれ育った人と、途中からやってきた人とが、これまでを共有することは出来ない。でも、根なし草にしかできない、その場所での役割がきっとあるはずだ。

この言葉には続きがあった。「だって全部いいんだよ。自然の雄大さには毎年はっとするし、食べもんだってうまい。いつもはっとするよ。」自分が暮らしている街のいいところを掘っている人は案外少ない。でも、住民が手放しで「全部いい」と言える場所はいいに決まっている。自分はいま暮らしている街のことを、他の地域から来た人にどれだけ伝えることができるだろう。どれだけ誇らしく雄弁に語ることができるだろう。

日本全国で過疎地と認定されている地域は全体の３分の１を超える。過疎が進むと、土地や住宅の荒廃が進む。野生動物との関わり方も変わってくる。また、過疎地域では少子高齢化が顕著な例が多く、子どもが減ると教育環境を変えざるを得ない場合がほとんど。その場合おおよそスクールバスが出るが、便利さと引き換えに通学路で得る経験値を失ってしまわないか。子ども時代の経験は大人になっても、ボディブローのようにじわじわきいてくる。

四季って解像度低い

何をもって自分は人間と自覚するか

1時間で5杯以下は飲んでない

根子にこんといて

番楽の練習の後は、反省会という名の飲み会が行われる根子集落。50世帯150人ほどの小さな集落で、集落内は徒歩で移動できる。否応にも近所とともに生きる必要がある土地では、暮らしの合う・合わないは顕著だろう。根子を離れる人を沢山見送ってきたであろう自治会長は、飲み会のときに「もう根子にこんといて」と言った。そして帰り際に笑顔で投げキッスをしていった。嬉しい、けど寂しい。たくさんの寂しさを乗り越えてきたのだろう。

「明日は天気が荒れるぞ」滞在中、何度聞いたかわからない。実際飛行機が飛ばず新幹線も、高速道もさえも止まった日もあった。東京では、雪や台風の日はすぐに街が慌てふためき店や電車が止まる。しかし吹雪でも秋田の飲み屋は元気だ。目の前の道路がカチカチに凍って、寒風が容赦ない日も飄々と店を開ける。そして日本酒を嗜む秋田の女性3人組が言う。「1時間で5杯以下だったら飲んでないのと一緒やから」彼女らの帰り道の足取りは軽い。

飲み屋で日本酒を飲む男性が言う。（ゆったり日本酒を口に運び、水も忘れず。お酒の楽しみ方が見ていて気持ちいい）「何をもって自分は人間と自覚するか。」お金をためては人のために使うことを繰り返してきたという男性は、妻に何度怒られようとも同じことを繰り返してきたという。なぜそこまでしてと尋ねると、「自分が人間として生活している以上、誰かのために何かをしないと生きている理由が分からない」と言った。人間の条件。

四季のある国、日本。春夏秋冬の織りなす美しい風景は、この国に生まれてよかったとと思わせてくれる。しかし秋田の山奥の集落、根子で暮らす人は言う、「四季って解像度が低い」と。自然とともに生きる地域では、自然を4つに分割することなど出来ない。もっと細かいスパンで、自然の見せる表情は刻一刻と姿を変える。根子に一晩泊まっただけでも、一晩で降り積もった雪で翌日はまったく違う姿をしていた。七十二候があるのも納得。

知られていないところを知りたい

うんちくとかどうでもいい

根無し草の役割

体で覚える

マタギの里と言われる「根子」の番楽の練習は子どもたちが主役。根子近隣の集落からも、番楽をやりたい！と通う子供もいるという。最近、9年ぶりの移住者がやってきた。20代の彼は、子どもたちとともに番楽の練習を受けている。練習は、毎週行われる。アクロバティックでたおやかな番楽の動きは一朝一夕では身につかない。「体で覚えるしか無い」。舞いの形式が能楽の先駆を成す根子番楽。古くから伝わる新しい動きは、体にじんわり染み込ませるしか自分のものに出来ない。

誰しも生まれ故郷といま暮らしている場所があり、人によってそれは同じだったり違う場所だったりする。ずっと同じ場所にいる人と、違う場所に腰を据えようとする人それぞれのジレンマや悩みを抱えている。遊牧民のようにたゆたうもよし、その場所に根をはろうとするもよし。生まれ育った人と、途中からやってきた人とが、これまでを共有することは出来ない。でも、根なし草にしかできない、その場所での役割がきっとあるはずだ。

秋田はなんといっても地酒が美味い。そしてお飾りなわけではなく、飲みに行ったときも地元民らは日常として日本酒を嗜んでいる。土着の酒。店では、日本酒ソムリエさながらのスタッフがあれもこれもと丁寧に説明を加えておすすめしてくれる。常連のグラスが空き、「お好みの感じだと…」と話はじめたらびしゃり。「うんちくはどうでもいい。あんたに注いでもらう酒が一番うまいよ」心地の良い関係性が美味の一匙になる。

秋田で暮らして20年を超すという男性は、これまで東京、サンフランシスコ、ハワイで暮らしてきたという。華々しい土地を転々とし、仕事の都合で居を構えた秋田。都心から田舎へ。物足りないのかと思えば、「秋田は20年住んでも飽きない」という。そして「まだ知らないところだらけだ」と。わたしたちは、自分が暮らしている場所のことをどれだけ知っていると言えるだろうか。郷土について知ることができる余白は十二分にある。